

第 10 号 最強オバチャンへの道のり :

SHG連合体による生産・物流センター計画&運営委員会に名前がつけました！

(平成 17 年 6 月 28 日発行)

最強オバチャンへの道のり: SHG連合体による生産・物流センター計画&運営委員会に名前がつけました！

3 月に発足した SHG の連合体による生産・物流センター計画&運営委員会。

現在、ビシャカパトナム市内から 5 グループ、同市郊外のグループから 2 グループの、合計 7 グループがメンバー SHG となっている。選抜によって選ばれたこの 7 つの SHG は、約 100 名のオバチャンたちから成る。6 月 20 日には、7 グループ、約 100 名のオバチャンたちの投票結果が発表され、今まで仮名で呼んでいた「生産・物流センター計画&運営委員会」の名前が決定した。

一番多くの票を集めた「ビシャカ・ヴァニタ・克蘭ティ」。

「ビシャカ」はビシャカパトナム、「ヴァニタ」は女性、「克蘭ティ」は、歩み、というのがそれぞれの単語の意味。この地(ビシャカパトナム)で、水が渾々とわき出る泉のように、女性の力があふれ出るようなグループを創っていきたい、というオバチャンたちの思いが込められている。

さて、「ビシャカ・ヴァニタ・克蘭ティ」のオバチャンたちは、ソムニードが主催するワークショップや各視察の他に、4 月から毎月 2 回ずつ、7 グループで集まって、自主的なミーティングも開き始めた。ソムニード主催のワークショップや SHG への視察では、日当や交通費は、支給されるもののほとんど実費に近いようなものだから、SHG オバチャンたちがワークショップやミーティングに参加する、となると、ほとんどその日の収入はゼロ。

毎月の「ビシャカ・ヴァニタ・克蘭ティ」のミーティングでは、ミーティングが月に 1 度しかなければ、交通費は各グループ負担、必要に応じて、ミーティングが月に 2 度以上になるときは、プロジェクト費を使う、というオバチャンたちからのリクエストがあり、そのように事業を進めている。

1 日野菜を売っていくら、1 日何枚洗濯をしていくら、という日雇い賃金労働者の多いオバチャンたちが、ワークショップやミーティングに出てくるのは、実は大変なこと。にもかかわらず、「日当を 円以上、交通費は 円以上、プロジェクト費から出してくれなくちゃ、研修にもミーティングにも出ない」なんて、誰一人、言わないオバチャンたち。

ワークショップやミーティングの参加者は、各グループの貯金の中から交通費を出したり、同じメンバーばかりが毎月の行事に参加するのではなく、交代でいろいろなメンバーが参加したりと、各グループ、やりくりしながら事業に参加している。

「そんなに何度もミーティングを開いて、根を詰め過ぎているのじゃない？大丈夫？」、なんてプロマネ(略:プロジェクト・マネージャー)が声をかけたくなくなってしまうくらい、「もう今日一日じゃ足りないわっ！明日もミーティングをするわよ、あさっても！」なんて、毎度、鼻息の荒いオバチャンたち。

6 月もなんだかんだと、会計ワークショップに 2 日間、「ビシャカ・ヴァニタ・克蘭ティ」のミーティングで 7 グループの代表が集まって、事業計画を作成するのに 3 日間、各グループでのミーティング

が2日間(各グループのミーティングは、今まで、月に1度のみだったが、最近では、ワークショップの成果の共有も含めて、2,3回は各グループ集まっている。)という具合に、オバチャンたちは、随分、頻繁に顔を合わせている。

6月20日、21日は、いよいよ「オバチャンたちによるオバチャンたちのためのPCUR-LINK年間事業計画(第2年次)をつくる」ということで、月ごとの活動がリストアップされ、それに必要な予算も書き出された。

初日の20日昼食後、最初にオバチャンたちが作った事業計画案の発表があったが、結果は、“6年かけても生産・物流センターにたどり着けない”という感じの、なんともんびりしたものだ。プロマネから、「JICAの事業は、2007年6月末に終了するってこと、覚えてる？」と言われて、「そうだった！こんなにノロノロやってちゃ、生産・物流センターができないうちにプロジェクトが終わっちゃうじゃない。もう一度計画を練り直すわっ！！」と、再び計画案を練り始めたオバチャンたち。20日朝から始まった年間事業計画作成のためのミーティングは、翌日の21日夕方5時半まで続いた。2日間、昼ごはんを食べるとき以外、ずーーーーーっと「あれもしよう、これもしよう、あれはダメ、これもダメ」と月ごとの活動をリストアップし、その活動に合わせて、計算機片手に予算の計算をしたオバチャンたち。21日の夕方には、もうフラフラ。オバチャンたちは、2005年10月までの事業計画とその予算を立てたところで、力尽きたようだった。

今まで、年間の事業計画を自分たちで作成し、しかもそれに予算をつけるなんて、一度もやったことのないオバチャンたちは、脳みそをすべて使い果たしたように、疲れ果て、誰も口を開かなくなってしまった。

結局、誰が言い出すでもなく、「はーああ。やっぱり、今日中に事業計画を完成させるのは無理だわ。23日に残りの計画を立てよう。」ということになった。さて、さて、今年度の事業計画はどうなることか。次号をお楽しみに。

スタッフの気持ち：「ビシャカ・ヴァニタ・クランティ」とマヒラ・アクションは別組織なんて思えない。

「ビシャカ・ヴァニタ・クランティ」のSHGメンバーを中心に、昨年度から継続の会計などの研修に加え、同センターの運営や商品開発のための研修もスタートする第2年次。いよいよ、オバチャンたちによる事業計画も作られることになり、プロジェクト開始からもうすぐ1年というのに。。。。。

オバチャンたちは、着々と「ビシャカ・ヴァニタ・クランティ」の組織づくりの第一歩として、会則を決めたり、団体登録の準備をしたり、年間の事業計画を立てたり、と日々前進している。ところが、マヒラ・アクションのスタッフはまだまだ「SHGは自分の支配下にある存在」という意識を捨てられない。各グループの月別定期ミーティングに行けば、グループの許可なく、勝手にグループの議論に介入する、やれ丸くなって座れ、やれ議事録を書け、とグループメンバーに命令する。「ビシャカ・ヴァニタ・クランティ」のミーティング会場をメンバーの同意を得る前に、勝手に変更してしまう、またミーティング中に、「お茶は止めましょう。その代わり全員に、ジュースを出しなさいよ。」と勝手に命令してしまう、等。とにかく細かいことを言い出せばキリがないくらい、「自分のミーティング」と「SHGのミーティング」の区別がつかない。

今まで何十年もマヒラアクションのスタッフは、SHGのオバチャンたちに「あれしろ、これしろ」と命令をし続け、彼女たちに何一つとして「決定させる」という作業をさせなかった。“貧しいスラムマヒラ・アクションのために”という「善意」の下で、オバチャンたちによる「意思決定や統治」を知らず知らずのうちに排除してきた。長年、身についた意識が、1年ちょっとのプロジェクト実施期間中に変わるほうがおかしい、とは分かっているけれど。。

少しでもソムニードのスタッフが目を離せば、どんな小さなことでも、オバチャンたちを自分の思う通りに動かそうと「あーしろ、こーしろ」と命令している。

「どうしたらいい？」とオバチャンたちが聞いてくるまで、待てないスタッフ。

「どうしたらいい？」と聞かれたら、逆にスタッフの方から「どうしたらいいと思う？」と、オバチャンたちに聞けないスタッフ。

オバチャンたちは、どんどん、ミーティングの開催日時を自分たちで決め、各ミーティングの予算も自分たちで決め、いよいよ事業計画まで自分たちで立てようとしているのに、スタッフは依然、「SHGオバチャンは無知で、何もできない、私は何でも知っている」態度を崩せないでいる。

スタッフの根拠のない優越意識はそうそう簡単には消えない。

あるSHG(グループ名:インディラ)の6月の月別定期ミーティングで、相変わらずSHGのオバチャンたちに、「ノートにまず議案を書け、大きな声で話せ、丸くなって座れ。」と命令している、マヒラ・アクションのスタッフ。SHGミーティングに勝手に介入し、つまらない命令をする度に、

「これはあなたのミーティングじゃないでしょ！SHGのミーティングなのよ！あなたが発言したいなら、その都度、手を挙げて、SHGメンバーに許可を求めなさい。それができないなら黙ってなさい！」

といつもなら、ソムニードのスタッフから叱られるマヒラ・アクションのスタッフ。毎月、毎月、同じ注意をマヒラ・アクションのスタッフに言い続けて、プロマネをはじめ、ソムニード・スタッフ一同、少々疲れ気味。この日は、たまたま黄門さまもミーティングに来ていたが、「ノートにまず議案を書け、大きな声で話せ、丸くなって座れ。」とSHGミーティングに介入をはじめたマヒラ・アクションのスタッフを黙って見ているだけ。黄門さま、グループ・ミーティングの最後に、手を挙げて「ワシがちょっと話していいか」と、オバチャンたちに聞く。

オバチャン一同:「どうぞ、どうぞ。アタシらのグループに何かアドバイスがあったら、言ってください、黄門さま」

黄門さま:「まず、これは誰のミーティングじゃ？」

オバチャン1:「アタシらインディラ・グループのミーティングよ！」

黄門さま:「そうじゃろ、だからワシは、手を挙げて“話していいか？”と聞いたのじゃよ」

オバチャン2:「だから、“いいですよ”って言ったのよ。」

黄門さま:「うん、うん、だから今から話すぞ。グループメンバー以外の者が、発言するときは、手を挙げて、アンタたちの許可を取ってから、話すのが、普通じゃろ？だってそれはアンタたちのミーティングだからな。それに、スタッフは、“アンタたちがミーティングに来てくれ”と言われれば、来

るけど、「別に来なくていい」というなら、来ないからな。」

オバチャン3:「アタしら、何か間違っってグループの運営をしているかもしれないから、スタッフにはミーティングに来てほしい。」

黄門さま:「そうか、そうか。アンタたちのやり方は別に間違っってはおらんよ。しかしな、ただ貯蓄を集める、ローンを返済する、利子を払う、これだけのことをするのに、1時間近くもかかって、アンタたち、ミーティングは楽しいか？」

オバチャン一同:「全然、楽しくない。もっとチャチャッと集金できないものかと思うわ。」

黄門さま:「じゃあ、こうしたらどうじゃ。。。。。」と黄門さまのアドバイスは続く。。。

黄門さまが投げる変化球を見ながら、マヒラ・アクションのスタッフに雷を落とすことしかできない、直球オンリー投手のプロマネ(この報告の筆者)は思った。“もうマヒラ・アクションのスタッフに、「自分のミーティング」と「SHGのミーティング」の区別をするために、あれこれ言うのは止めた方がいいんじゃないか。。。”それよりもSHGオバチャンたちの方から、「これはアタたちのミーティングだから、スタッフは、ちょっと黙っていてくれる？」と言えるようになる日の方が早いと思う。もちろん、オバチャンたちは、そんな直接的な言い方はしないだろうが、あれこれ命令しようとするスタッフを「さりげなく無視する」ことができる、したたかなオバチャンたちなのだ。

そんな日は、もうすぐそこまで来ているような気がする。

マヒラ・アクションのスタッフだけがいつまでも昔のまま、オバチャンはパワーアップしている。もうすぐプロジェクト開始から1年を迎えようとしている今、変化するオバチャンと変化しないマヒラ・アクションのスタッフとのギャップは大きくなるばかり、のようだ。

今月のグループ・ミーティング実況中継: Ma27(ビシャカパトナム市内スラム)の巻

このグループの名前を「Ma27」という。一見、変な名前だが、これはマヒラ・アクションが、SHGを組織するとき、すべてのグループに「マヒラ・アクション」とつけて、数字でMa1, Ma2, Ma3, と名前をつけたことによる。「ビシャカ・ヴァニタ・クランティ」のメンバーSHGでも、今から7,8年前に設立されたビシャカパトナム市内のグループは、今でもMa8, Ma16, Ma27という番号がついている。これらのグループは、マヒラ・アクションに依存していた期間が長く、マヒラ・アクションのスタッフを喜ばせておいて、ローンなどの利益を得ようと長い年月を費やしてきた。

Ma27も例外なく、最初は、あの手この手でソムニードのスタッフを喜ばせようとしてきた。例えば、生産・物流センター計画&運営委員会の名前を付けるのも、「ソムニード」とか、「水戸黄門」という名前にしようとか、かつて、マヒラ・アクションのスタッフが喜んだように、あれこれ試してみるのだが、ソムニード・スタッフは一向に喜ばない。ミーティングにソムニード・スタッフが来れば、やれお茶を出したり、やれソムニードのおかげだ、とお世辞を言い続けたりしても、全然ソムニードのスタッフは喜ばない。

このPCUR - LINK事業が始まって、ようやく1年が経とうとする6月、Ma27の月別定期ミーティングに出かけたソムニード・スタッフ。お茶もでなければ、スタッフに意見を聞くこともなく、黙々と自

分のグループのミーティングを続けるSHGオバチャンたち。ミーティング最後に、「じゃあアタシら帰るね、アタシらになんか質問があれば聞いてね、特になければ帰るね。」とソムニードのスタッフが聞くと、ようやく口を開いたオバチャンが1名。

オバチャン1:「あー、ちょっと待って。アタシら、これから生産・物流センターで事業を始めるんだけど、何をしたらいい？」

リーダー・オバチャン:「モーっ！、アンタ、何聞いてんのよっ！そんなことアタシらが自分たちで考えるのよっ！！アタシがワークショップに行ったときの話をアンタは何も聞いてないのねっ(怒)！！」

ソムニード・スタッフ:「まあまあ。オバチャン1のアナタ、もしソムニードのスタッフが、花屋をやれ、八百屋をやれ、と言ったら、アナタそれをするわけ？」

オバチャン 1:「えー、そんな花屋とか八百屋なんて、アタシには出来ないわ。」

ソムニード・スタッフ:「じゃあ、何が出来るの？」

オバチャン 1:「それがわからないから、聞いたのよ」

ソムニード・スタッフ:「じゃあ、商売を何もやらない、という選択肢もあるのよ、別に無理に生産・物流センターを始めてくれ、なんて言わないから。」

リーダー・オバチャン:「エーッ、そんなあー。せっかく“ビシャカ・ヴァニタ・克蘭ティ”という名前もつけて、視察にも行って、会計研修もいっぱい受けたのにーっ。絶対、アタシら、生産・物流センターを始めるわっ！」

ソムニード・スタッフ:「だったら、どんな事業がやりたいのか、それには何が必要なのか、自分たちで、考えてよ。」

リーダー・オバチャン:「(スタッフに向かって)今すぐにはわからないけど、もう少し時間をちょーだい、アタシたちで、事業計画を立てるから。(グループメンバーに向かって)今から、この前の会計研修で何を習ったか、もう一度、言うから、みんな聞いてなさいよっ！」

。。。ミーティングはスタッフが去った後も、さらに続く。

Ma27のオバチャンたちは、少しずつではあるが、「依存オバチャン」から、「自立オバチャン」に変化しつつある。SHGが設立されてからの年数が長いグループほど、スタッフへの依存が当たり前になっている。そういうグループほど、“ビシャカ・ヴァニタ・克蘭ティ”の他のグループのオバチャンに叱られることが多くなってきた。

同じSHG仲間から「ミーティングに遅れてくるなんて、どーいうつもりなの？」とか、「なんでスタッフにそんなこと聞くのよ、アタシたちの問題でしょ！」と怒られる度に、「依存オバチャン」を脱却してゆくオバチャンたち。

オバチャン同士のプレッシャーは、依存オバチャンからの脱却スピードを速めているのだった。
